乳幼児期における社会的参照の発達の意味およびその発達プロセスに関する理論的検討

九州大学 遠藤利彦 ・ 東京大学 小沢哲史

Developmental meanings and processes of social referencing in infancy: A theoretical review

Toshihiko Endo (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581*) and Tetsushi Ozawa (*Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo, Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902*)

When faced with the unknown or ambiguous, human beings tend to unconsciously consult others for guidance; they look to facial expressions or listen to vocal tones of others. Utilization of others as information sources, social referencing has been paid a lot of attention in developmental psychology, and its origin and development have been actively investigated and discussed. Nevertheless, there appear to be few integrated or comprehensive views on the developmental meanings and processes of social referencing in infancy. This paper reviews and evaluates various theoretical and empirical studies on early social referencing, and attempts to integrate them. Specifically, we first define social referencing and describe experimental paradigms to study infant social referencing. We next discuss its developmental function of effective learning facilitation and its requisites, such as understanding affect specificity and referential quality of information. We then consider some important problems in ontogeny of social referencing, in relation to theory of mind, attachment, and so on. And finally, we point out some unanswered questions and propose a new perspective for social referencing in daily situations.

Key words: social referencing, understanding of emotion, learning mechanism, theory of mind, infancy.

私たちは、常に、自身の内なる欲求や意志にしたがって、自律的に行動する存在ではない。人は、ひとたび他者との関係のなかにおかれると、多かれ少なかれ、他者の影響を被る存在としてある。そればかりか、ときに、他者が発する種々の情報を、自ら能動的に探索し、それを積極的に自身のふるまいに活かそうとする存在でもある。ことに、未知なるもの、不確かなものとの遭遇は、不可避免的に、人を社会的影響のもとにおくことになる。私たちはつい、その場に居合わせた他者の顔をのぞき込み、またその声色の変化に耳を立て、そのあいまいな事象や対象の意味を知ろうとするのである。

このような行動傾向は、ある意味、社会的存在としての人間の本質を垣間見させるものといえるわけだが、発達心理学の文脈においては、それが“社会的参照”(social referencing)という術語で問題にされ、その起源と発達をめぐって熱い議論がなされてきたという経緯がある。特に、近年、この社会的参照という現象は、新たな理論枠のもと、子どもの種々の学習を支える重要なメカニズムの一つとして、また、子どもの“心の理解”あるいは“心”そのものの成り立ちに密接にかかわるものとして、多くの発達研究者の注目を集めるに至っている。本論は、こうした近年の社会的参照研究の動向をおさえつつ、この現象の発達の意味およびその発達プロセスの諸問題について広く理論的

考究を行うこととしたい。そのうえで、批判的立場から、現今の社会的参照研究に相対的に欠落している視点をつまびらかにすることになろう。

1. 社会的参照とは何か

1.1 社会的参照の定義

議論を展開していくに先立って、まずは社会的参照という現象を学術的に定義づけておく必要があろう。一般的に社会的参照については大別して2通りの定義が流布しているといえる。一つは、“ある状況に対する自身の解釈を構成する際に、他者の同一対象に対する解釈を情報として活用すること”というものである(Campos, 1983; Feinman, 1982) (定義A)。もう一つは、“あいまいな状況において、他者に情報を求め、その情報を用いて状況に対する自らの対処行動を調整すること”というものである(e.g., Campos & Stenberg, 1981; Klinnert, Campos, Sorce, Emde, & Svedja, 1983; Feinman & Lewis, 1983; Klinnert, 1984; Sorce, Emde, Campos & Klinnert, 1985) (定義B)。前者はいわば、社会的参照の意味を、情報探索に限定して考える立場であるのに対し、後者は、それに加えて行動調整という要素もその基本要件の一つとする立場であるといえよう。研究者によっては、さらにこの二つの間に情動調整という要素を組み入れて考える向き

もある (Walden & Knieps, 1996)。この見方によれば、“意味の不確かな対象と遭遇した際に生じた不安定な情動状態を、他者が発する情報を活用し、その対象の意味を知る (情報探索) ことによって建て直し (情動調整)、さらにはその対象に対する自らの行動を決定・実行する (行動調整) という一連のプロセス”こそが、社会的参照であるということになる (定義C)。

おそらく、“参照” (referencing) という語の一般的な意味からすれば、現実の行動を調整することまでも、その概念規定の中に包摂することにはややいきすぎの感がある。大人を想定して考えた場合、他者が発する情報を積極的に求めたとしても、それをあえて選択的に自身の解釈に活かさないということもありうるだろう。また、なんらかのかたちで解釈にいかしたとしても、別段、それによって自らの行動を変えない、あるいは、他者が発した情報にそわない行動をとることもあろう。すなわち、情報を探索し活用することと、行動を調整することは必ずしも連動したものではないのである。しかし、発達研究の文脈のなかでは、通常、定義Aよりも定義BあるいはCがとられることが多い。これは、社会的参照研究において主たるターゲットとなる乳幼児の場合、いまだ十分に言語を絡めて他者に問い合わせることができず、まして自身の内観を言語的に表明しえないために、情報探索の有無そのものが、外に現実に現れた行動上の変化をもって判定されなくてはならないからである。いわば、実験上の操作的な定義として定義BやCが多く採られているといえるわけだが、行動調整までもその成立要件の一つとする定義上のしびりが、日常的現象としてあるさまざまな社会的参照に関して狭くかたよった見方をもたらしたとの批判が一部にあることをここで付言しておく (e.g., Walden, 1991)。

1.2 社会的参照研究の基本的枠組み

既述のとおり、発達研究における社会的参照は、一般的に行動調整までを含めて問題にされることが多いわけだが、ここでは、それが、具体的にどのような手続きをもって取り出されるのかについて、より詳細にみておくことにしよう。まず、乳幼児にとって探索の対象となる情報とは何かということであるが、それは他者の顔や声あるいは行動に現れる種々の情動表出ということになる。言語をはじめとする象徴的な意味体系の世界に入る以前の乳幼児にとって、情動が、他者との間をつなぐ最も重要なコミュニケーション・ツールである (e.g., Hobson, 1993; Lewis, 1993) ことを考えれば、それは半ば当然のことといえるかもしれない。

情動とは、一般的に、ある事象に接した際の、個体のその事象に対する“評価” (appraisal) の反映とい

えるものである (e.g., Lazarus, 1991; Oatley, 1992)。それだからこそ、私たちは、他者の情動表出から、その他者がある事象や対象に対して潜在的にどのような心理的スタンスを有し、またどのような意味を帰属させているかをうかがい知ることが可能なのである。しかし、乳幼児段階からすでに子どもは成人と同様に、情動の背後に広がるこうした意味の世界になんらかの気づきをもちえているのだろうか。当然のことながら、発達研究者の関心はその点に注がれることになる。それを明らかにするために、具体的な実験手続きとして、乳幼児を未知なるものや人に遭遇させ、その際に乳幼児が身近にいる他者 (主に養育者) に視線を向けるか否か、そしてその他者の情動表出の意味にそったふるまいをその未知なる対象に対してうまく組織化しうるか否かを問うことになるのである。

これまでの研究では、大別して (a) 視覚的断崖 (e.g., Sorce et al., 1985), (b) 見知らぬ人 (e.g., Boccia & Campos, 1989; Feinman & Lewis, 1983), (c) 動きや音声をとまなう新奇な玩具あるいは小動物 (e.g., Gunnar & Stone, 1984; Hornik & Gunnar, 1988) という3種類のものが、乳幼児を不確実・不安定な心理状態におくあいまいな刺激・状況として用いられている。

視覚的断崖とはもともと乳幼児の奥行き知覚の存在を確かめるべく案出された実験装置 (Gibson & Walk, 1960) であり、深さ 30 cm から 1 m ほどの溝のうしろに厚い透明なガラス板が渡され、乳幼児程度の体重ならば十分にそのうしろをハイハイして移動することが可能となっている。実験のなかで、乳幼児は、魅力的な玩具に近づくために、その深みのあるガラス板の上をどうしても渡っていかなくてはならないという状況におかれる。深み、そしてその上に置かれた透明なガラス板などは、乳幼児が日頃 (少なくとも自らの運動をとまなう経験としては) まだあまり経験していないものであり、その意味で、移動が可能なのかどうか、不確実であいまいな対象といえるわけである。

見知らぬ人との遭遇は、いわゆる“人見知り” (stranger anxiety) に関する実験手続き (e.g., Horner, 1980) をそのまま用いたものとみることができ、そこで乳幼児は、突然部屋のなかに入ってきて、自らに近づいてくる、またときには、自分に玩具を差し出したり、自分を抱き上げたりしようとする、見知らぬ成人との対面を余儀なくされる。

新奇な玩具との遭遇は、最も一般的に用いられている実験手続きであり、子どもが座っている部屋のなかに、見慣れない形をした玩具が、多くの場合、奇妙な動きをしながら、また少し騒がしい音を立てながら入ってくる。そこで、子どもは、好奇心をそえられる一方で、なかば恐れや不安を抱き、結果的に、あいまいで不安定な心理状態におかれることになる。

こうした不確実状況に接するという条件設定で、子どもの近くに身をおく、母親をはじめとする、子どもにとっての親密な他者は、意図的に、快、不快（悲しみ、恐れ、怒り、嫌悪など）の情動を、顔の表情あるいは声を通じて表出することを求められる。あるいは表出を変化させずに一貫して中立的態度をとることを求められる。

評価のポイントは、子どもが“参照視”（referential look）と呼ばれる明確な頭部回転をともなった注視行動を身近な他者に対して向けうるかどうか、そしてそこで感知した他者の情動表出に合致した態度や行動を刺激に対してうまく構成しうるかどうかという点である。他者の情動がポジティブな表出であるときに、当該刺激に対して近接や接触といった行動をみせたり、あるいは自ら快の情動を表出するなどし、また、逆に他者の情動がネガティブな表出であるときに、刺激に対して退却や回避の行動パターンを示したり、あるいは自ら不快や苦痛の情動を表出するなどした場合に、一般的に、その子どもにおいて社会的参照が明確に成り立っていると判定されることになる。

こうした一連の実験手続きは、より自然で生態学的妥当性の高い状況において、乳幼児の情動コミュニケーションに対する理解の質と程度を把握しようという試みのなかから生まれてきたものとされている（Campos & Stenberg, 1981; Feinman, 1982）。社会的参照の研究以前から乳幼児が各種情動表出の静止画や動画に対して弁別的な反応を示すことはある程度知られていたわけだが、そこで問題になっていたのは、いわば物理的刺激としての情動表出の識別が可能であるということと、各種表出の個別の意味を理解しているということを果たして等号で結びうるのかどうかということであった。Campos & Stenberg（1981）らは、従来の社会的文脈を欠いた情動弁別実験からそのことを知ることは不可能であると考え、現実に応答的行動が必要となる状況のなかで、各種情動表出に対する乳幼児の“生きた”反応を体系的に吟味しようと企図したのである。その試みは、これまでにある程度の成功を収めてきたと考えられる。現に、どの時点からどのようなかたちの社会的参照行動が可能になるのか、その発達の里程碑のようなものは、かなりのところ解明・整理されてきているといえるからである。

しかしながら、親密な他者に注意を向け、その他者の情動表出と合致する行動をとることが“ことごとくすべて”、適応上必要な情報を能動的に探索するという社会的参照そのもののメカニズムを意味することになるのか、ときに、まったく別のモチベーションやメカニズムに由来して同様の行動が生じる可能性は皆無なのかといった、従来の実験パラダイムを根本から揺さぶるような問いが、現在、新たに浮上してきている。こうした点については、後に、特に3節で改めて

考察を行うことにしたい。

2. 社会的参照はいかなる発達の意味を有しているか

ここでは、社会的参照が発達的にみて、いかに着目に値する現象であるかということについて、社会的参照が子どもの発達全般にもたらしうるもの、そしてまた社会的参照を支え、可能ならしめる発達の要素という二つの観点から、理論的な考究を試みることにしたい。

2.1 社会的参照“が”支えるもの

発達早期における社会的参照が興味深いのは、一つにはそれが、子どもが環境世界について種々の知識を獲得し、また構造化していくうえできわめて効率的な学習メカニズムとして機能すると考えられるからである。社会的参照は、その後の子どもの生活に深く関与するであろうさまざまな状況や事象が、情動的重要性という観点からして、どのように評価されるべきかということに関する家族や社会の意味システムを徐々に子どものなかに根づかせる貴重な学習ストラテジーといえるのである（Saarni, 1999）。さらにいうならば、それは、人間の文化のなかにあらかじめ蓄えられたものとしてある膨大な情報が、子ども自身の知識として徐々に内在化されていく過程で、きわめて重要な役割を担うものと考えられる。

Tomasello, Kruger, & Ratner（1993）は人間特有の文化的学習を支える基本的メカニズムとして、“模倣学習”（imitative learning），“教示学習”（instructed learning），“協同学習”（collaborative learning）の3種類のものを仮定し、そのうち、個体発生的に最も早期に現れる模倣学習のなかに、この社会的参照を位置づけている。彼らによれば、新生児段階からすでにみられる身体的同調作用（動作模倣、共鳴動作、情動伝染など）が、純粋に他者の外的行為や動作の忠実な再現・模倣であるのに対し、それより遅れて生じる模倣学習は、行為の再現そのものよりも、ある対象に対してその行為を起こそうとする他者の態度や心的状態の理解に重きがあるのだという。換言するならば、行為そのものの再現・習得ではなく、行為の裏側にある意味の習得であるところにその本質があるということなのだろう。

Tomasello らは、社会的参照を含む模倣学習の進行によって、子どもは他者“から”直接的に学ぶのみならず、他者“を通して”間接的にも学ぶことが可能になるのだと推察している。すなわち、養育者をはじめとする他者との直接的なやりとりのなかから、あるいは他者によって巧みに配慮され与えられる諸刺激から、何ものかを学ぶのみならず、他者の目標や視点、さらには種々の心的状態を感知することを通して、自らを取り巻く環境世界に関する知識を構築しようとい

うことである。これは、子どもが自ら当事者として、試行錯誤的にある対象や事象との直接的経験を踏まなくとも、あるいはまた、自らリスクやコストを負うことなく、迅速で効率的な学習が可能であるということの意味する。

Baldwin & Moses (1996) はまた、社会的参照を、情動表出のみならず言語などを含めて広く能動的に他者に情報を求めていく“社会的情報収集” (social information gathering) のなかに位置づけ、他の基本的学習機構である“直接的探索” (direct investigation) および“観察学習” (observational learning) との根本的な違いについて考察を行っている。直接的探索は系統発生的にみても、個体発生的にみても最も原初的な学習メカニズムといえるものであり、人間の子どもの出生直後から外界の対象を種々の感覚器官を用い、能動的に探索することを通して、対象の機能的な意味と、それに対する自らの適応的なふるまいを学習することができる (e.g., Piaget & Inhelder, 1969)。しかし、そこでの知識は、自己と対象の直接的なかわりのみから発するものであり、ある意味、外界に遍在している他のいかなる情報も個体の知識獲得に活かされることはない。

また、観察学習も直接的探索ほどではないにしても、広く他生物種にも認められるものであり (e.g., Mitchell, 1987)、人間の子どもの発達早期から、モデルとする他個体の行為とその帰結との“物理的”関連性を習得することができる (他個体の心的状態の理解は必要ではない) (e.g., Meltzoff, 1988a, 1988b)。それは、生物個体における知識獲得の機会を大幅に増大させるものであるが、他者が情報の源あるいは運び手であるという理解を前提とはしないために、個体は、自身にはない情報を豊富に有するであろう他者に“意図的に”焦点を合わせ、そこから“能動的に”情報を引き出すということをしない。個体は、たまたま注意を向けた顕在的な対象とそれに対する他個体の行為との連なりから、いわば“受け身的に”適切な行為パターンを学習するのみである。

それに対して、社会的参照あるいは社会的情報収集の中核的特質は、その能動性にあるといえる。私たちが社会的生物としてあり、自分自身よりも進んだ知識を有する複数の個体と生活をともにするかがり、ある意味、情報はいくらかでもそこに転がっている。したがって、能動的に必要な情報を探索していけば、無限大に近い知識を獲得することが可能なのである。このことの重要性は、たとえば、必ずしもよい教え手とは限らない、配慮の乏しい養育者のもとで生育していかざるをえない子どもを想定することで、よりあらわになるといえるかもしれない。養育者が自ら子どもに対して積極的に情報を発しなくとも、養育者が自然にふるまう日常生活者であるかがり、子どもはいくらでもそ

の養育者から豊かな情報を“盗む”ことができるのである (よい教え手が不在でも、よい学び手は存在する)。人間の子どものが不遇で非応答的な環境下でも、ときに驚くほどの発達の弾力性 (resilience: e.g., Rutter, 1987) を発揮しうる背景に、こうした能動的な社会的情報収集能力を仮定して考える研究者は少なくない (e.g., Shatz, 1987)。

2.2 社会的参照“を”支えるもの

社会的参照が着目に値するもう一つの理由として、その成立に、人間の個体発生という点からしてきわめて興味深い、いくつかの重要な発達の要素がからむという点を挙げることができる。多くの研究者の見解が一致するところでは、情動の弁別的理解、そして情報の指示的性質 (referential quality) の理解という、少なくとも2種の認知的コンピテンスの発達を礎石として、あるいはそれらと連動して、社会的参照は初めて成立するものらしい (e.g., Saarni, Mumme, & Campos, 1998; Walker-Andrews & Dickson, 1997)。

Darwin (1872) に由来する基本情動理論 (basic emotion theory) は、各種情動の生物学的適応価を強調し、少なくとも喜び、怒り、恐れ、悲しみ、嫌悪、驚きなどの情動については、それらを経験・表出する機構はもちろん、それらを受容・理解する機構も、人間の乳幼児に生得的に備わっていると仮定している (e.g., Ekman, 1992; Izard, 1991)。この仮説の当否についてはさまざまな議論がある (詳細は遠藤, 1995, 1996) が、多くの研究者が、少なくとも生後1年目の終わり頃までには、原初的な情動理解が成立するとみなし、それが社会的参照実験における乳幼児のしかるべきパフォーマンスに結びついていると考えているようである。顔なり声なりに現れる各種情動表出の意味を弁別的に理解しているからこそ、拒むべきものには忌避的な態度を示し、また近づくべきものには好意的な態度をとることができるというのである。なお、Saarni (1999) は、社会的参照が、単に“他者”の情動表出の意味を理解するのみならず、“自身”の主観的情動状態をも的確に覚知する必要がある現象だと把握している。自身の不安定な情動状態を覚知しているからこそ、それとは異なる他者の情動表出に焦点化することが可能だということである。

情報の指示的性質の理解とは、いってみれば、視線なり表情なり発声なり、他者のなんらかのふるまいあるいはそこに含まれる情報が、常にある特定の何ものか“についてのもの”であるということ [Brentano (1874/1973) や Searle (1983) などがいうところのいわゆる“aboutness”] を明確に認識しているということである。Tomasello (1995a) にいわせれば、他者を“何ものかを志向する主体” (intentional agent) として理解しているということになる。さらにいうな

らば、自己と他者がある同一対象に対してともに注意を向けていることの理解、あるいは自己-他者-対象という三項関係の表象が、社会的参照には必然的にからむことになると考えられる (Adamson, 1996; Klinnert et al., 1983; Messer, 1997)。子どもは、自身が遭遇したあいまいな対象について他者に問合せをするために、本来まずは、その他者の注意がどこにあるかを確認する必要がある。そして、他者の注意が自身と同じ対象に注がれていることを知ったうえで、他者の発する情動的情報を、ほかの何ものでもない、まさしくその対象の意味として活用することができるというわけである。

こうした情報の指示的性質の理解あるいは三項関係の表象を、いわゆる“心の理論” (theory of mind: 直接的には知覚しえない自他の心的状態の基本的性質や機能について人が潜在的に有している知識、素朴理論) (e.g., 子安・木下, 1997; Premack & Woodruff, 1978; Wellman, 1990) という観点から考えることもできる。近年、その“心の理論”の起源を発達過程のどの時点までさかのぼりうるかということに関する議論がかまびすしいわけであるが、その一つの代表的立場として、生後1年目の後半になってほぼ同期して現れるとされる共同注意 (joint attention: 狭義の定義としては、他者の頭部や視線の動きを察知し、その注視方向に自身の注意を合わせる行為)、原叙述的コミュニケーション (protodeclarative communication: 指さしやしぐさなどをもって自身の注視点に他者の注意を呼び込み、自身の心的状態を他者に伝達しようとする行為)、そして社会的参照などのいわゆる第二次相互主観性 (secondary intersubjectivity: Trevarthen & Hubley, 1978) にかかわる発達現象の成立を重くみる向きがある (e.g., Baron-Cohen, 1991a, 1991b, 1995; Bretherton, 1991; Reddy, Hay, Murray, & Trevarthen, 1997)。

確かに、子どもは、生後1年目の前半からすでに、他者との間で一見“心”の介在を感じさせる、高度に社会的なやりとりを展開することができる (遠藤, 1997)。他者の視線、動き、表情、発声などに、特異な感受性をもって、かなりのところ随伴的な反応を示しうるのである [Trevarthen (1979) がいうところの第一次相互主観性 (primary intersubjectivity) にかかわる行為]。しかし、これらの反応については、純粹に身体的同調作用という観点から説明することができないわけではない (e.g., Lewis, 1991, 1995)。また、それは多くの場合、自発的なものではなく、養育者のある意味、過剰な解釈にそって巧みに導かれたものであるといえる (遠藤, 1998; 荻野, 1997)。養育者の微笑に対して同じく微笑という行為をもって反応する子どもは、必ずしも、養育者の快的な主観的情動状態を

“理解”したうえで、自らそれを共有しようと“意図”して、微笑しているのではないかもしれない。そうした内的プロセス、あるいは心というものに対する気づきをいっさい介在させずに、外的に知覚できる行為に、ほぼ自動化されたかたちで連動・共鳴しているにすぎないかもしれないのである。

しかし、自己と他者の間に必ず、ある対象をはさむ共同注意や原叙述的コミュニケーションや社会的参照などにおいては、一般的に、他者の心的状態に対する覚知が必須要素になると考えられている (e.g., Gopnik & Meltzoff, 1994)。人の注意や情動表出などは、直接、ある対象に対して物理的な影響をもたらすものではない (視線を送っても微笑みかけても、対象は不変のものとしてそこにあり続ける)。したがって、当然のことながら、客観的に知覚される外的変化を通じて、主体と対象との関係を知ることはできない。そして、その潜在的な関係を知りえないかぎり、乳幼児が、少なくともその関係の意味にそった適応的な行為を起こしうるはずはないのである。

Moore (1996) によれば、多くの研究者が半ば常識的な見解として、こうした“対象との距離を置いた行為”の背後に、“心の理論”成立の中核的要件とされる (a) 主体と対象の間になんらかの“心理的”関係が存在していること (たとえば、他者がある対象に対して特別な興味を寄せている、何かを感じている、欲しているなど) の理解、そしてまた (b) ある対象との間にこうした心理的關係をもちうるという意味で自己と他者が同等 (equivalent) であることの理解、が潜んでいると仮定しているらしい (もっとも、後でもふれるが Moore 自身はこうした見解に対して懐疑的である)。もし、こうした見解を採るとすれば、社会的参照は、潜在的な“心の理論” (implicit theory of mind: Bretherton, 1991)、あるいは少なくとも“心の理論”の先駆体 (precursors of theory of mind: Tomasello, 1995a, 1995b) に支えられて初めて成立するものだともいえるわけである。

なお、Baldwin & Moses (1996) は、情動表出の弁別的理解および情報の指示的性質の理解という要素に加えて、概念的に規定されたとおりの社会的参照が具現されるためにはさらに二つの要素、すなわち、社会的情報の潜在的有用性に関する理解と、必要な情報を引き出すためのスキルが必要になるとしている。前者は、いってみれば、実際に情報がもたらされる前から、自分自身の無知に関してある種の気づきを持ち、自身にはない有用な情報を潜在的に有しうる存在として他者を想定し、その他者から情報を得る必要性を明確に認識しているということである。後者は、単に他者を視覚的、聴覚的に知覚するばかりではなく、ときには指さしや身振り、さらには発達が進めば言葉を交

えながら、必要な情報を他者から効率的に引き出すためのスキルのことである。

これら二つの要素は、社会的参照のいわば“能動性”あるいは“自発性”にかかわるものと理解できるだろう。すなわち、先述した定義にあるように、社会的参照を、情報を自ら探索し求める行動であるとすれば、それは、たまたま情動を発した他者の近くに居合わせたから、結果的にその影響を被ることになったという“受け身的”あるいは“消極的”な反応とは、一線を画すことになる。ある対象に関する自己と他者の知識の差異を理解し、自身の無知を埋めるために、さまざまなスキルを援用しながら、他者が発する情報を“能動的”“積極的”に探索できるということこそが、真の社会的参照に結びつくということなのだろう。

3. 社会的参照の発達をめぐる諸問題

提示刺激の違いによって若干の開きがあるが、先に示したような実験状況において、仮説的に想定されたとおりの社会的参照行動が現に認められるようになるのは、一般的に生後9か月以降とみられている (e.g., Saarni, Mumme, & Campos, 1998)。これまでの研究で、最も早い段階における社会的参照の報告は、Boccia & Campos (1989) によってなされたものであり、それによれば、生後8か月半の乳幼児が、見知らぬ人との遭遇に際し、養育者に視線を向け、その情動表出の意味にそったふるまいをみせたという。Tomasello (1993) は、こうした社会的参照や共同注意などの萌芽がほぼ同期して認められる生後9か月前後を“9か月の奇跡”と呼び、その時点に心的発達上の大きなターニング・ポイントがあるのだらうと推察している。

しかしながら、生後1年目の後半という早期段階においてすでに、社会的参照行動が、先にみたような発達の要素をすべて兼ね備えた、いわば“完成体”としてあり、その後、不変のものとしてあり続けると把握することにはいささか無理があるように思われる。他者の情動表出にそったしかるべき行動を対象に対してみせるという行動基準からすれば、確かにさまざまな月齢で同じように社会的参照行動が成立しているというにしても、子どもがそれを行う状況、活用する情報の様式、情報を引き出す方法、さらにはそれが生じるメカニズムなどには、確実に発達的变化が存在すると考えられる (e.g., Baldwin & Moses, 1996; Walden, 1991)。ここでは、前述した、社会的参照の基礎と考えられる各種発達の要素とのからみを吟味しながら、社会的参照の発達のプロセスについて論考を試みることにしたい。

3.1 情動表出の弁別的理解にかかわる問題

まず情動表出の弁別的理解という点からして、早期

段階の社会的参照行動が真にこの要件を満たしたものなのかどうかについて考えてみよう。これまでの社会的参照実験の一つの問題点として、比較的多くの研究において、情動的情報の様式が十分に統制されてこなかったという点が挙げられている (e.g., Saarni et al., 1998)。実験に参加した身近な他者、特に養育者は、ほとんどの場合、正負の情動を、顔の表情、発声、身振りなどを同時に“多重モード”で用いながら、表出してきたのである。そこで問題になるのは、子どもが弁別的な理解を示しうるのは、顔の表情に対してなのか、情動の音声的特質に対してなのか、それとも行動上の特質 (特異な身振りや姿勢) に対してなのかということである。

さらに、もう一点想定しておくべきことは、単一モードでたとえば顔の表情だけを変化させた研究 (e.g., Sorce et al., 1985) において、予測されたとおりの結果が得られたとしても、そもそも、それをもって真に、乳幼児が、正負それぞれの表情の意味に対して弁別的理解を示したといえるのかどうかということである。生後1年以内において養育者が子どもに対して表出する情動はポジティブなものが圧倒的に多く、逆に怒りや恐れといったネガティブなものは相対的に稀少であることが知られている (Kuchuk, Vibbert, & Bornstein, 1986; Zumbahlen & Crawley, 1996) (ハイハイや歩行など、子どもの自発的運動が活発になり出してから、それを制止しようとして養育者のネガティブな情動表出が急増する)。ということは、特に負の情動条件で、子どもが行動制止や回避などの反応を示しえたという場合、それがたとえば“警告”といった情動の意味に関する適切な理解に基づいたものなのか、それとも、養育者の顔面表出の見慣れなさ、および普段あまり経験しない養育者の応答性の低さなどに起因したものなのか、要因の分離が難しいということになる (Mumme, 1993)。

また、これに関連していっておくならば、特に恐れ of 表情を養育者に作らせた場合に、その表情がとかく不自然なものになりがちであることが報告されている (e.g., Rosen, Adamson, & Bakeman, 1992)。子どもは、状況の不確かさに加えて、養育者の様子や対応のあいまいさを経験しているかもしれない、それが子どもの刺激対象に対する消極的な態度につながっている可能性も否定できないのである (Baldwin & Moses, 1996)。

こうした疑問に完璧に答える知見はいまだ得られていないというべきである (Saarni et al., 1998) が、少なくとも生後1年前後の早期段階において社会的参照行動が確認されているのは、ほとんどの場合、顔と声の情動表出を同時に与えた実験においてである (e.g., Hirshberg & Svedja, 1990; Hornik, Risenhoover, & Gunner, 1987; Rosen et al., 1992)。顔面表出のみを問題にした研究においては、概して社会的参照の存在

をいぶかる否定的な結果が得られているようである (e.g., Zarbatany & Lamb, 1985). Mumme, Fernald, & Herrera (1996) は、生後 12 か月の子どもを対象に、顔面表出のみを変化させる条件および発声的特質のみを変化させる条件の実験を行っているが、結果は後者の発声条件のみで、子どもが情動の種類 (快, 恐れ) に応じて適切に反応しようということを示すものであった。また、社会的参照に限定したものではないが、Walker-Andrews (1997) は、乳幼児の情動知覚に関するこれまでの研究を概観し、顔面表出に関する認識が、発声に含まれる音感的調子に関する認識よりも遅れて生じてくると結論している。

おそらく、生後 9 か月頃から認められるという発達早期の社会的参照行動においては、子どもは主に情動の音声的特質 (あるいは複数モードからなる全体的特質) を手がかりに状況の意味を判断しているのだといえるかもしれない。そこから、生後 2 年目に入って徐々に、顔の表出のみからも必要な情報を抽出することができるようになるのだろう。もっとも、生後 2 年目の後半にもなると、当然、子どもはある程度、ことばの意味を理解するようになり、少なくとも日常場面では、養育者などの言語に含まれた情報をより活用できるようになることが想定される (Baldwin & Moses, 1996)。

なお、これまでの研究は総じて、情動が正か負かということに対する乳幼児の弁別的反応について知見を積み重ねてきたといえるものの、恐れや怒りや嫌悪といった特にネガティブな情動間の差異についてはいまだほとんど有用な知見を得ていないことをここで付記しておく。

3.2 情報の指示的性質の理解にかかわる問題

次に情報の指示的性質の理解ということについて吟味してみることにしよう。もともと社会的参照の実験が行われ始めた時点から、一部に、社会的参照“らしき”行動は、他者の情動がある特定対象との関連で生じてきたという理解を前提としなくとも、別種のメカニズム、すなわち“情動伝染” (emotional contagion) あるいは“気分変容” (mood modification) を通じて十分生起しうるのはではないかという議論があった (e.g., Feinman & Lewis, 1983)。子どもは別段、他者の情動が特定対象の意味を指し示していることを理解しているから、それを用いて特異的にその対象に対する行動を変えたのではなく、他者の情動に巻き込まれるかたちで自身の情動状態を大きく変えてしまい、その結果、行動全般に変化をきたしたのではないか、そしてそれが当該対象についても及んだということにすぎないのではないかというのである (Boccia & Campos, 1989)。

この気分変容の効果に最初に着目した Feinman &

Lewis (1983) は、養育者の恐れの出表に接した生後 10 か月児が、提示刺激に対してのみ行動上の変化 (ネガティブな態度) を示し、養育者との関係についてはポジティブな相互作用を維持したこと、気分変容が行動全般に影響をもたらしたとは考えがたいとし、乳幼児が指示-被指示の関係を理解していることを示唆している。しかし、愛着という観点から考えれば、見知らぬもの、怖いものとの遭遇時などに、身近な他者とのポジティブな関係を回復・維持しようとするのはある意味、自然なふるまいであり (Bowlby, 1969), Feinman らの観察は、気分変容仮説を必ずしも完全に退けるものとはいえない (Baldwin & Moses, 1996; Saarni et al., 1998)。

その後、Hornik et al. (1987) は、より直接的証左を得るべく、母親がある情動表出を向けた新奇な玩具と、もともと実験室に置かれていた自由遊び用の玩具に対して、生後 12 か月児が異なる反応を示すかどうかを問題にした (気分変容仮説が妥当であれば、他者の情動の効果は両玩具に等しく及ぶことになる)。その結果、ポジティブ条件よりもネガティブ条件で当該玩具に対する接触が有意に少なくなること、一方、自由遊び用の玩具については条件にかかわらずその接触に違いが認められないことなどが明らかとなった。確かに、これは表面上、気分変容仮説に対する十分な反証となっているかにみえる。が、子どもは母親が当該玩具を見ていたからではなく、自分自身にとってその玩具が新奇でより顕著 (salient) であったために、自身の変容した情動状態をその玩具にたまたま結びつけてしまったのかもしれない (Mumme & Fernald, 1995)。また、自由遊び用の玩具は、ずっとその場にあり親近性が高く、かつ遊びやすい (少なくとも脅威を与えない) ものであったために、(特にネガティブ条件において) 慰撫や気晴らしの対象として機能したという可能性も否めない (Saarni et al., 1998)。

子どもが情動的情報の指示的性質を理解していることを明確に示すためには、新奇性および目立ちやすさという点で同等の複数刺激を準備し、そのうえで、当該刺激に対してのみ行動上の変化が生じ、かつそれが他の刺激には及ばないことを明らかにする必要があるといえよう。現在までに、こうした要件を満たす研究がすでに二つ行われている (Baldwin & Moses, 1994; Mumme & Fernald, 1995)。そして、方法に若干の違いがあるが、両研究とも、生後 12 か月時点ですでに、情動表出の効果が当該刺激に対する反応において特に顕著であることを明らかにしている。12 か月児が、すでに情動的情報の指示的性質を理解しているらしいということは、生後 1 年前後の乳幼児が、指さしをはじめとする種々の指示的身ぶりに敏感に反応する (e.g., Corkum & Moore, 1995) という点からすれば、ある意味、自然なことといえるのかもしれない。もっと

も、気分変容による効果がまったく認められないわけではなく、たとえば、Baldwin & Moses (1994) は、当該刺激に比して明らかに少ないものの、大人から無視された刺激のほうにも、若干、情動の質にそった行動上の変化が現れうるということを見いだしている。また、複数の試行を重ねる実験において、先行試行でもたらされた情動状態の変化が、次試行の行動に影響を及ぼす、いわゆる“持ち越し” (carry-over) 効果の存在も認められており (Klinnert, 1984; Walden & Baxter, 1989; Walden & Ogan, 1988)、少なくとも早期段階の乳幼児のふるまいに関しては、厳密な意味での指示-被指示の理解およびその結果としての情報探索・行動調整というメカニズムのみならず、情動伝染や気分変容といった他の要因の介在も考慮しておく必要があるのだろう。

3.3 社会的参照と原初的な“心の理論”

ここまでみてくると、生後9か月頃に始まる社会的参照は、ある程度、情動の弁別理解および情報の指示的性質の理解を下敷きにしたものといえるかもしれない。そして、その意味からすれば、先に見た原初的な“心の理論”との関連も十分に想定できることになる。乳幼児が漠然とではあっても、他者と対象との心理的關係、すなわち他者がある対象をたとえばおもしろいものあるいは恐いものと“表象”していることを理解 (表象) しているからこそ、換言するならば、ある種の“メタ表象”をもち合わせているからこそ、そこに社会的参照が成立すると解釈できないことはないのである (Baron-Cohen, 1991b)。

しかし、こうした見方に対して疑念を表明する向きもある。Moore ら (Corkum & Moore, 1995; Moore & Corkum, 1994) は、Perner (1991) の表象発達理論などに依拠しながら、こうした原初的な“心の理論”が社会的参照や共同注意などを可能ならしめるというよりも、むしろ、こうした行動の生起が先にあって、それが徐々に原初的な“心の理論”を生み出すという因果の方向性を想定すべきであると主張している。Perner (1991) によれば、発達早期の乳幼児の行動は、基本的に現実に関する“単一の”表象あるいは心的モデルに支配されており、またそうした表象は、新情報に関する処理が行われるたびに次々と更新されていく性質を有しているという。同時に二つ以上の表象を有し、それらの間の比較などを通じて、複雑な情報処理をなすようになるのは、早くとも生後2年目の後半以降になるらしい。

Moore らは、こうした発達早期における表象処理の制約を考えれば、たとえば、自己と他者の両方がある対象に対して同時に注意を向けていること、あるいは意図や欲求といったある心理的スタンスを有していることを、一度に表象することはまず不可能であり

(いかなる意味でもメタ表象など成り立っているはずもなく)、その意味で、生後9か月あたりから現実には観察される社会的参照や共同注意などが、原初的な“心の理論”に支えられて生じているとは考えがたいと推察するのである。

Moore らによれば、子どもは発達の早期段階からすでに、道具的学習 (オペラント条件づけ) および遊びなどを通じた養育者などによるトレーニング (Bakeman & Adamson, 1984)、あるいはある種の生得的メカニズム (Baron-Cohen, 1995) によって、他者の視線の方向に、(他者の心的状態としてではなく、あくまでも子ども自身の直接的経験として) “何かおもしろいもの”がありそうなこと、あるいは他者の情動表出がなんらかの意味を提供するものであることを“結果的に”知ることになり、それがときに共同注意や社会的参照を可能ならしめるのだという。たとえば、条件づけの考え方にしたがえば、他者の頭部回転に合わせて、たまたま同じ方向を見たときにかんがいの確率でおもしろいものあるいは快的なものなどが発見されるという経験の蓄積を通して、結果的に他者と同じものに注意を向けること、すなわち共同注意が定着していくというようなことである [現に Corkum & Moore (1995) は、それまで自発的に共同注意を起こしたことのない乳幼児が、一連の条件づけを通じて、共同注意を示しうるようになることを確かめている]。社会的参照についていえば、やはり同じく道具的学習により、他者の情動表出のパターンと回避や接近といった行動のしかるべき連合が習得され、結果的に、他者の情動表出の知覚から、乳幼児自身の適応的ふるまいが導かれるようになるというようなことである。

ただし、そこで重要なことは、いずれの場合においても、乳幼児が、他者の視線や表情が、その他者の特定の対象に対するなんらかの心理的關係 (意図や欲求など) を示すものだという理解あるいは素朴理論をあらかじめ有している必要がないということである。Moore らは、むしろ、そうした人と特定対象の心理的關係についての理解、いってみれば原初的な“心の理論”が、発達早期の共同注意や社会的参照によって、そしてまたそれに随伴して生起する乳幼児自身の内的・心的経験を通じて、徐々に生み出されてくるのだろうとしている。Moore らの見解はあくまでも仮説的なものであり、その可否をここで議論することは控えるが、もし、こうした見解が妥当なものであるならば、原初的な“心の理論”は、社会的参照“を”支えるものではなく、むしろ社会的参照“が”支えるものだということになるのだろう。

ここで、原初的な“心の理論”との関連においても一つ興味深いトピックを挙げておくことにしたい。それは、自閉症者における社会的参照の特異性にかか

わるものである。自閉症者の“心の理論”をめぐることは実にかまびすしい議論がなされている (e.g., Baron-Cohen, 1995; Happé, 1994; Hobson, 1993) が、自閉症者が、発達早期においてどのような社会的参照を示すかについては、これまで必ずしも十分な知見が得られてこなかったといえる。その意味で、部分的にこの問題を扱った Bacon, Fein, Morris, Waterhouse, & Allen (1998) の研究は特筆に値するものと考えられる。

彼らは、意味のあいまいな音声聞かされた際に、知的水準の高低にかかわらず、自閉症児が総じて社会的参照を行わないことを明らかにしている。高機能、低機能いずれの自閉症児も健常児、精神遅滞児、言語発達障害児に比して、周囲にいる大人を参照視することが有意に少なかったのである。Bacon らはこの結果を受けて、社会的参照、すなわち他者からある対象に関する意味を引き出すことの困難さが、自閉症という障害の中核的特質の一つとなっており、それが“心の理論”の特異性とも通底している可能性を論じている。もっとも、彼らは、社会的参照の少なさと特異な“心の理論”との関連性に関して、前述した Moore 寄りの立場を採り、自閉症児においては、情動調律 (affect attunement) や情動知覚の問題がより本質的なリスク要因としてあり、それらが、社会的参照の少なさを招来し、そしてひいては“心の理論”の発達に阻害的な影響をもたらすのだらうと推察している。

3.4 情報探索の能動性にかかわる問題

社会的参照の前提条件として、上で議論した情動表出の弁別的理解および情報の指示的性質に関する理解という二つの要素に加えて、Baldwin & Moses (1996) が、社会的情報の潜在的有用性に関する理解と、必要な情報を引き出すためのスキルが必要になると仮定していることは先に述べたとおりである。ここでは発達過程とのからみでその点について多少とも考察を試みることにしよう。

Baldwin らは、生後1年前後の乳幼児が、情動的情報を与えられた際に、それをある対象との関係でうまく活用できることを否定しない。多くの研究者が社会的参照の基本要素とみなす情動の弁別的理解と情報の指示的性質の理解についていえば、確固たる事実として、乳幼児が1歳前後からすでにその要件を満たす社会的参照“らしき”行動を十分に示しうることを認めている。しかし、彼らによれば、その時点の子どもは情報のよき“消費者” (consumer) であっても“能動的探索者” (active seeker) ではなく、真の (概念的に想定されるとおりの) 社会的参照をいまだ実現できていない可能性が高いという。確かに、子どもは、ほとんどの実験場面において、かなりの確率で他者に自発的に視線を向けることが知られている [Baldwin らは

だいたいその確率が69% (Klinnert, 1984) から100% (Walden & Ogan, 1988) の間にあるとみている]。が、彼らが問題にするのは、能動的注視が真に能動的“情報探索”を意味するのだろうかということである。すなわち、養育者などに視線を投げるとき、乳幼児は、情報源や情報の性質等を明確に理解し、その理解にしたがって、自ら意図的に必要な情報を得ようとしているのかということである。

まず、彼らは、本来、子どもの日常一般の注視行動の頻度をベースラインとして比較したときに、あいまいな対象に接した直後の注視行動が際立って多いのかどうかを問題にすべきだとする。なんら刺激がないとき、あるいは日頃見知った対象に接しているときとその注視活動に差がないとすれば、それは特別に情報探索を意味するものではなく、乳幼児の一般的注視傾向を反映するものにすぎないということになろう。しかし、研究の現状としては、あいまいな対象と遭遇した際の注視行動とその後におけるそれとの比較はある (e.g., Boccia & Campos, 1989) もの、遭遇前と遭遇直後の比較はいまだなされておらず、注視行動が純粋に情報探索欲求から生じたものかどうかは不明である。また、発達早期 (生後6-13か月) の子どもは、あいまいな刺激と接した際に養育者に視線を投げるにしても、そうするまでに平均して1分前後の時間を要するという報告がなされている (Walden & Ogan, 1988) (ちなみに、14-22か月児の平均は30秒を超える程度である)。Baldwin らは、乳幼児が養育者を確実な情報源と認識し、能動的に情報探索していると考えするには、この反応潜時はあまりにも長く、乳幼児の注視活動がもっと他の要因に起因している可能性は否めないとしている。

Baldwin らは仮に譲歩して、刺激対象と遭遇した直後に、乳幼児の養育者などに対する注視活動が際立って増大するというを受け入れるとしても、それを能動的な情報探索の現れだと結論するにはなおも根拠が希薄だという。彼らがそこで問題にするのは、知と無知の識別ができ、(自身が無知である場合には) 外から情報を取り入れることが有用で、かつ他者は自分自身には欠けている情報を有している可能性があるということをあらかじめ理解していなければ、人は、情報をいかにして誰から引き出すべきなのか、その見通しを立てられないことはもちろん、そもそも、情報を探索しようという欲求そのものをもたないであろうということである。

しかし、知識というものに関する子どもの理解を問題にした研究は、生後1歳前後からすでに乳幼児が知と無知の識別をなしうることに対して総じて否定的である。たとえば、子どもの自発的な日常発話のなかに、心的概念獲得の証左を見いだそうとした Bartsch & Wellman (1995) は、子どもが“知ってい

る”“知らない”といった人の知識状態にかかわる発話をするようになるのは、早くとも3歳以降になることを明らかにしている。また、各種実験をもって、この問題にアプローチしている研究においても、3歳よりも前に、こうした理解の萌芽を見いだしているものは稀少である。かろうじて、O'Neill (1996) が2歳半の段階にその予兆を認めているくらいである。

Baldwin らは、いずれにしても現段階までに、2歳より前に知と無知の識別ができるということを示すデータはほとんど得られていないとして、子どもが1歳前後からすでに自発的な情報探索、ひいては厳密な意味での社会的参照を行っているとは到底考えがたいと結論している。

3.5 愛着の観点からみる養育者に対する注視

Baldwin & Moses (1996) の論考が妥当なものであるとすれば、生後9か月頃からすでに認められる、刺激遭遇直後の養育者などに対する注視を私たちはどのように解釈すればよいのであろうか。Baldwin らは、それを愛着行動の枠内で十分に説明が可能だとする。Bowlby (1969, 1973, 1980) あるいは Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) の愛着理論が仮定するところでは、生物はこの世に生を受けた時点から他個体との近接を求めたり、近接関係を維持しようとする傾向を本源的に備えているという。特にこうした傾向は、人間の乳幼児のように、際立って移動能力にも摂食能力にも乏しい生物個体にとっては、安全と生存を保障するうえで不可欠の働きをするということになる。Bowlby によれば、そうした近接欲求（愛着欲求）は、後追いやしがみつきたいといった物理的近接行動のみならず、ときに定位や発信といった遠隔的行動によっても充足される。すなわち、子どもは発達の最早期段階から、養育者などに身体や頭部の向きを合わせ、また視線を送り、場合によってはそこに微笑や泣きなどの情動表出をからめることで、最大限に養育者などの関心を引き寄せ、それを通じて近接関係を維持しようとするのである（Sroufe, 1996）。

さて、あいまいな事象や対象との遭遇を余儀なくされる社会的参照実験において、子どもは、かなりの確率で、恐れや不安などのネガティブな情動経験をしていることが想定される。愛着欲求および愛着行動が最も活性化される場面が、ネガティブな情動が喚起される危機的な状況である（Bowlby, 1969）ことをふまえば、愛着行動のレパートリーの一つとしてある注視行動が社会的参照実験において際立って生じやすくなるとしても、別段、不可思議なことではない。むしろ、それはきわめて自然のことといえるだろう。すなわち、そこでの注視は、“情報を求める行動”（information-seeking behavior）ではなく、自身に対する“慰撫を求める行動”（comfort-seeking behavior）

である可能性が否定できないということである。また、子どもは特にネガティブな情動状態になくとも、養育者などとの間で、親和・提携（affiliation）の関係をとり結ぼうとする存在でもある（Bowlby, 1969）。たとえば、その一環として、子どもが、養育者などとの間で、ある種の情動を共有しようとして注視行動（affect-sharing behavior）を起こしたとしても、さほど驚くには当たらないだろう。

こうした Baldwin らの見解にそうものとして、Dickstein, Thompson, Estes, Malkin, & Lamb (1984) が得ている知見は実に興味深い。彼らは、社会的参照実験における子どもと養育者の距離を操作し、距離が大きくなればなるほど、あいまいな対象と遭遇した直後の注視行動が増大するというを見いだしている。養育者との距離がもともと大きい状況とは、すでに、ある程度、愛着関係が脅かされている状況といえる。そして、そこであいまいな対象に接することは、輪をかけて子どもを不安な状態におくことになるだろう。情報探索という観点からいえば、子どもの注視行動に対する動機づけ（無知ゆえにあいまいで不安定になっている心的状態を適切な情報を補うことで減殺しようとする）はあくまでも子ども自身と対象との関係から生まれるものであり、そこに本来、養育者との距離は影響を及ぼさないはずである。しかし、現にその影響が認められたということは、もともと子どもが情報探索以外の動機づけ、おそらくは愛着欲求によっても注視行動を起こしているということにある程度示唆するものといえるだろう。

また、Dickstein らは、子どもの愛着タイプ（A 回避型・B 安定型・C アンビバレント型：Ainsworth et al., 1978）と実験場面での養育者に対する注視活動との関連性もみている。それによれば、注視行動は、C アンビバレント型の子どもで最も多く、その後には B 安定型、A 回避型が続いたという。この順番は、実のところ、養育者に対する接触・近接欲求の強さ（愛着行動が活性化されやすい傾向）および養育者の位置に対する注意深さの順番と一致するものであり（Ainsworth et al., 1978）、その意味で、この知見も、愛着欲求を重要な動機づけ（の少なくとも一部）として、注視行動が生じているのだということにある程度、裏打ちするものといえよう。

Walden & Baxter (1989) が得ている知見もまた、基本的に Baldwin らの見解にそうものである。彼らは、状況の親近性によって、子どもの社会的参照に影響が及ぶことを想定し、子どもにとって見慣れた保育施設での子どもの養育者に対する参照視と、初めての実験室におけるそれとを比較・検討している。当初、彼らは、見知らぬ状況における注視行動がより多くなると仮定していたが、結果はそれとは逆のパターンを示すものであった。すなわち、親近性の高い保育施設

における注視頻度のほうが有意に高かったのである。これは一見逆説的な結果といえるわけだが、Waldenらは、家を出るときから子どもがずっと養育者とともにすごしていた実験室状況よりも、通常、養育者が子どもを預けて立ち去り、また迎えに来るという保育施設のほうが、まさに分離や再会が問題になるという点で、愛着システムの活性化を引き起こしやすく、結果的にそれが養育者に対する注視行動の増大を招来したのではないかと推察している。

なお、Baldwinらは、注視活動とともに、一見情報を効率的に得ようと意図して用いているかに見える各種のスキル、すなわち、指さし、対象の呈示、発話・発問などについても、基本的に情報探索以外の観点からの説明が可能であると主張する。それは、単に子ども自身の注意の移行を示すものであったり、慰撫欲求を示すものであったり、具体的な援助要求（情報探索ではなく養育者などから具体的な行為を引き出そうとする）あるいはまた情動共有欲求を示すものであったりする可能性が否めない。というよりはむしろ、少なくとも比較的早期段階に見られるそうした行動については、情報探索以外の説明のほうがより説得力があるというのである。

議論がやや複雑になったので整理しておくならば、Baldwinらの主張は、あくまでも、子どもが最初から、自分にはない情報を“能動的に”探索しようという意図をもって注視行動を行わないということである。子どもは、情動の弁別的理解や情動的情報の指示的性質の理解を基盤として、生後9か月くらいから徐々に、タイミング良く情報が与えられた場合には、養育者に対する注視を通じて“結果的に”事象や対象の意味を知ることができるようになる。すなわち、先述したように情報の“よき消費者”になりうる。しかし、それは情報探索の能動性を欠いているという意味で、いまだ真の（定義どおりの）社会的参照ではなく、むしろ“社会的感受性”（social receptiveness）とも呼ぶべきものである。Baldwinらによれば、子どもが“能動的探索者”（active seeker）になり、真の社会的参照が具現されるようになるのは、いくら早く見積もっても生後24か月以降になるだろうという。こうしたBaldwinらの見解は、いまだすべて傍証に支えられた理論的なものでしかない。しかし、少なくとも、それが、“注視行動＝情報探索”という暗黙の前提にしばられた、従来の社会的参照実験の枠組みを根本から揺さぶるものであることは、ある程度確かなことであるように思われる。

4. 現代社会的参照研究の相対的欠落点を問う

本論は、社会的参照の発達の意味および発達プロセ

スの諸問題について、広く先行研究を概観・整理し、可能なかぎり精細な議論を行ってきたつもりである。しかし、筆者らは従来の研究の流れに、相対的に欠落している視点がいくつかあると考える。最後に、そうした点について批判的論究を試みておくことにしたい。

4.1 社会的参照実験はどれだけ子どもの“コンピテンス”あるいは“能力”を測りえているか

社会的参照の実験パラダイムは、個人が“一様に”ある対象や事象に対して“わからない”“あいまいである”という評価をし、その結果、不安定な情動状態を経験すること、また、動機づけとしてそうした情動状態の低減を欲するということを暗黙の前提としている。そして、そうした状況における一つの対処方略として、能動的情報探索を行いうるか、より具体的には、他者の情動表出に積極的に注意を払い、自身の適応的行動に役立てうるかを問題にするわけである。しかし、刺激の物理的等価性は心理的等価性を保証するものではありえない（Lazarus, 1991）。当然のことながら、同じ刺激に接したすべての個人がそれに対して同じ評価をし、また同じ不安定な心理状態を経験し、そしてまた同じ動機づけを有しているとは限らないのである（Oatley, 1992）。このことは、実験における子どものパフォーマンスが、情報探索を行いうるか否かというコンピテンスの差異というよりも、ある刺激状況に対する評価や心的状態の差異を反映したものでありうるという可能性を示唆する。

原理的に、社会的参照の実験パラダイムは、不安定な情動状態を経験しながら情報探索を“行えない”（すなわち社会的参照のためのコンピテンスが未発達な）子どもと、不安定な情動状態を経験していないがゆえに情報探索を“行う必要のない”（すなわち潜在的にコンピテンスを有していても社会的参照の動機づけを有していない）子どもを分離できないのである。また、子どもは、場合によっては、不安定な情動状態を有し、潜在的に情報探索行動を起こしながら、他者の情動の手がかりを不適切と判断し、あえてその手がかりにそわない行動をとる可能性さえもある（こうした場合、子どもは情報探索あるいは社会的参照を行わない、あるいは行えないと判断されてしまうことになりかねない）。

さらに、もう一つ厄介なのは、刺激との遭遇直後に養育者に対する注視行動が生じたとしても、それが必ずしも等質な評価および動機づけに起因して生じるわけではないということである。それは、唯一、情報探索欲求からのみ生じるのではなく、実に多様な状況評価および欲求・動機づけに起因して生じうる可能性があるのである。先にBaldwin & Moses (1996)の見解についてみたが、子どもの注視行動は、近接欲求、慰

撫欲求、あるいはまた情動共有欲求などの現れかもしれない。このことは、たとえば、子どもが“結果的に”他者の情動的情報の影響を受け、その情報の性質にそった行動を組み立てたとしても、その行動の背後にあるメカニズムは、評価や動機づけという点からして、決して一様ではありえないということの意味する。操作した情動の性質にそった行動を子どもがきっちりとしたか否かということをも唯一の基準とする従来の実験パラダイムでは、もともと明確な情報探索欲求を有し“積極的に情報を取りに行った”子ども（ある意味、能動的な真の社会的参照行動を起こした子ども）と、たとえば、恐れから近接欲求の高まりを覚え、養育者の存在を確かめに行った結果、その養育者の“情動に受け身の巻き込まれてしまった”子ども（Baldwin にいわせれば社会的感受性を有してはいても真の社会的参照行動を起こしたとはいえない子ども）をほとんど分離できないのである。

もちろん、いくつかの改良を加えることによって、評価や動機づけの差異といった要因の混入を最小限に抑え、真の社会的参照にかかわるコンピテンスや能力をより敏感に取り出すことも可能かもしれない。たとえば、1種類だけではなく、多様な特質をもった刺激を複数種、準備し実験を行い、それらに対するパフォーマンスを精緻にかつ総合的に吟味すれば、わずかながらでも従来よりは精確に子どものコンピテンスをうかがい知ることができよう。また、刺激との遭遇直後の注視活動に関しても、単に注視が生じたか否かということのみならず、それに随伴する種々のふるまいまでを含めて観察を行えば、それが情報探索を企図したものなのか、それ以外の動機づけに基づくものなのかをある程度峻別できると考えられる。現に、Hornik & Gunner (1988) や Desrochers, Richard, Decarie, & Allard (1994) は、子どもがあいまいな心理状態におかれ、明らかに他者が発する情動的情報を探索しようとしているならば、子どもの発声や顔にしかるべき情動表出がとれない、また注視時間などの側面にも特異な性質が現れるはずだとして、ややもすると一見同様にみえてしまう諸行動間の識別を試みている。たとえば、Desrochers らは子どもが驚きか困惑かを示すこと、あるいは子どもが刺激に対して3秒以上の注視を行うこと、そしてその後に母親の表情を1秒以上注視すること、という条件をクリアした場合に、それを参照視であると操作的に定義づけている。

筆者らは、こうした実験手続きの改良を通して、子どもの社会的参照にかかわるコンピテンスや能力をより厳密に測定しようという方向性をいぶかるものではない。しかしながら、社会的参照実験が“原理的に”ある意味、状況評価のプロセスと（情動制御方略としての）社会的参照との分離されえない“総合点”の差異を取り出す（純粹に後者のコンピテンスのみを抽出

しうるものではありえない）ものである以上、やはり、こうした改良によって引き上げられる実験の精度にも自ずと限界があるのではないかと考える。少なくとも、私たちは、社会的参照実験によって取り出される子どものパフォーマンスのみをもって、その子どものコンピテンスや能力の成否を判断するということに対して、より慎重であるべきなのだろう。

4.2 社会的参照実験の生態学的妥当性：“日常的現象”としてある社会的参照の本質は何か

本論のここまでの議論からもすでに明らかであろうが、従来の研究のほとんどは、社会的参照をもつばら、子ども個人の内なるコンピテンス・能力の反映として扱ってきたものといえる。発達心理学の一つの目的が、ある発達現象に関する精細なタイムテーブルを作成すること、すなわち、一般的に何がどの時点でどのようなかたちで現れるかを時系列的に記述していくことだとすれば、こうしたスタンスは半ば当然のものと首肯できる。確かに、等質な条件統制のもと、社会的参照の成否確率および特質の変化をとらえ、それぞれの年齢時における認知的コンピテンスの限界をつまびらかにすることを通じて、平均的な発達の里程碑を構成してきたことの意味は当然相応に評価されてしかるべきものであろう。しかし、こうした研究の方向性が、真に“日常的現象”としてある、社会的参照そのものの実態に即したものであったかどうかについては、もう少し慎重に考えてみる必要があるように思われる。

当然のことながら、社会的参照とは本質的に三項関係の問題であり、子どもと同一の対象に注意を注ぐ他者の存在なくしてはいかなる意味でも成り立ちえないものである。だからこそ、現今の社会的参照の実験パラダイムは、もっぱら、他者を子どもと同一対象に関心を注ぎ、それに対して自らなんらかの評価をし、また情動的に反応する存在と仮定し、現実にならうとした他者を配置することで種々の実験結果を得てきたのだといえる。さらにいえば、そこでの他者は、基本的に子どものふるまいとは独立・並行的にただ情動表出する存在としてあり、他方、子どもは、半ば“一方的に”，そうした他者の表出を有用な情報として“盗み”活用する存在としてあるのである。しかし、日常の発達の文脈に目を向けた場合、そもそもこうした状況はどれだけ自然なものといえるのだろうか。日常的状況を考えた場合、養育者をはじめとする他者は、もちろん実験パラダイムで仮定されているようなふるまいをいっさい、みせないこともあれば、逆に、仮定されている以上の豊かなふるまいをみせることもある存在なのではないだろうか。

実験パラダイムで仮定された以上にふるまうというのは、養育者が、子どもと同時並行的にある対象を体

験し自ら反応するだけではなく、その対象に注意を向ける子どもの様子にも関心を払い、子どもの状態に合わせた行動をとろうとするということである。すなわち、ある対象に対して自分自身、なんらかの評価をし情動的に反応するだけではなく、加えて、子どもが自身に向けてきた注視などの潜在的な意図を解釈し（たとえば、子どもは何かわからなくて困惑しているのだろうと推察して）、それに応じて、明らかな伝達意志のもと、自らの情動表出を操作するということである（たとえば、危なくないよということを伝えるために微笑みを作る）。場合によっては、養育者自身は、当初、子どもが注意を向ける対象に対してなんら情動的に反応していないかもしれないし、あるいはまた、そもそも子どもの関心がどこにあるかを特別に意識していないかもしれない。むしろ、子どもから注視や発声といったシグナルを受けて“初めて”，子どもの関心の所在を探し、あるいは推測し、それから子どもの心的状態を考慮して、その時点で意図的ななんらかの情動表出を作るということも少なくはないだろう。

従来の実験手続きが企図するものは、子どもが、自分の周囲に転がっている適切な情報を、能動的に探索し、活用しうるか否か、そのコンピテンスの成否を探ることであり、そのために、他者はいわば情報を“垂れ流す”存在としてそこに位置づけられていたといえる。しかし、日常場面における養育者などの他者は、むしろ多くの場合、子どもが求める適切な情報を能動的に“伝達”しようとする存在だと考えられるのである。日常的現象としてある社会的参照の多くは、子どもが他者の表出を情報として汲み活用するという一方的なものではなく、子どもがシグナルを送出し、そしてそれを受けて養育者などが応答するという“双方向的な社会的交渉”としてあると考えるのがより自然であろう。

Walden ら (Walden, 1991; Walden & Knieps, 1996) は、まさに、子どもの注視を養育者に対する子どもからのシグナル（信号）であると考え、社会的参照を、そのシグナルと、それに対する養育者の随伴的応答との組合せという観点からとらえ直す試みをしている。彼らの仮定する組合せとは以下3通りのものである。(a) 子どもの養育者に対する注視（シグナル）が現実を生じ、それに養育者が随伴的に応答する場合 (hit)。(b) 子どもの養育者に対する注視が現実を生じているが、養育者がそれを見落とすか、それに随伴的に応じない場合 (miss)。(c) 子どもの注視が現実にはないにもかかわらず、養育者が誤ってなんらかのかかわりをしてしまう場合 (false alarm) [信号検出理論からすればこの他に注視（信号）がないことを正確に認知し何も応答しないこと、すなわちコレクト・リジェクション (correct rejection) の存在が想定されるわけであるが、Walden らの分析枠にこれに相当するも

のはない]。

彼らは、健常児と発達障害児およびその親を対象に、日常の相互作用の特性を、こうした組合せの観点から観察し、それと実験場面における子どもの社会的参照行動の生起との関連性を検討している。その結果はやや複雑であるが、発達障害児に関しては、随伴的応答が少ないあるいはミスの多い養育者をもつ場合に、その子どもの適切な社会的参照行動が生じにくいこと、あるいは、健常児でも（やや年長児の場合）、フォールス・アラームの多い養育者をもつ場合に、全般的に抑止的行動パターンが強まり、社会的参照行動が生じにくくなることなどが明らかにされている。こうした結果からみても、子どもの社会的参照の現出・様相・展開が本質的に他者の配慮やふるまいのあり方に依存せざるをえないものであることは半ば自明のことといえるのではないだろうか。潜在的に子どもの側に社会的参照の“準備状態”があっても、他者がそれを見落とししたり、また自身に子どもが向けてきた注視を問合せや参照という意味では解釈しないような場合、そこに“具体的行為”としての社会的参照は少なくとも完全型としては実現しないのである。

少なくとも、発達早期段階における現実の社会的参照は、養育者と子どもとの双方向的な社会的交渉としてあり、また多分に養育者側の巧みな配慮に支えられてあるということに研究者はもっと積極的な関心を向けてよいのではないだろうか。こうした視点の転換は、子どもが養育者との間で経験する日々の関係性のあり方が、社会的参照の成否および発達にどのようにかかわっているかという興味深い問いを惹起する。実のところ、従来の研究は、社会的参照の“平均的な”発達の里程碑を構成することにはある程度成功してきたといえるが、その個人差およびその規定因に関する分析は相対的に立ち後れているといわざるをえない (e.g., Saarni et al., 1998)。Walden らが示している方向性は今後、社会的参照の発達メカニズムを明らかにするうえで、より重要性を増してくるに違いない。

5. 結 び

今回は特に社会的参照に焦点をしばって議論を構築したわけだが、それが自己-他者-対象という三項関係の問題であるかぎり、本来ならば、共同注意や原叙述的コミュニケーションなどの現象とあわせて、より広く、早期社会的コミュニケーションの発達として論を構成することも可能であったろう。しかし、本論では紙数の都合でそれを断念せざるをえなかった。今後の課題として、こうした類似現象間の理論的架橋を図る作業が残されたということを確認して、ひとまずは、ここで論を結ぶことにしたい。

文 献

- Adamson, L. B. 1996 *Communication development during infancy*. Boulder, CO: Westview Press.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bacon, A. L., Fein, D., Morris, R., Waterhouse, L., & Allen, D. 1998 The responses of autistic children to the distress of others. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **28**, 129-141.
- Bakeman, R., & Adamson, L. B. 1984 Coordinating attention to people and objects in mother-infant and peer-infant communication. *Child Development*, **55**, 1278-1289.
- Baldwin, D. A., & Moses, L. J. 1994 Early understanding of referential intent and attentional focus: Evidence from language and emotion. In C. Lewis & P. Mitchell (Eds.), *Children's early understanding of mind*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 133-156.
- Baldwin, D. A., & Moses, L. J. 1996 The ontogeny of social information gathering. *Child Development*, **67**, 1915-1939.
- Baron-Cohen, S. 1991a The development of a theory of mind in autism: A case of specific developmental delay. *Psychiatric Clinics of North America*, **14**, 33-50.
- Baron-Cohen, S. 1991b Precursors to a theory of mind: Understanding attention in others. In A. Whiten (Ed.), *Natural theories of mind: Evolution, development, and simulation of misreading*. Oxford, UK: Blackwell. Pp. 233-252.
- Baron-Cohen, S. 1995 *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Barrett, K., & Campos, J. 1987 Perspectives on emotional development: II. A functionalist approach to emotions. In J. Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development*. 2nd ed. New York: Wiley. Pp. 555-578.
- Bartsch, K., & Wellman, H. M. 1995 *Children talk about the mind*. New York: Oxford University Press.
- Bertenthal, B., Campos, J., & Barrett, K. 1984 Self-produced locomotion: An organizer of emotional, cognitive, and social development in infancy. In R. Emde & R. Harmon (Eds.), *Continuities and discontinuities in development*. New York: Plenum. Pp. 175-210.
- Boccia, M., & Campos, J. J. 1989 Maternal emotional signals, social referencing, and infants' reactions to strangers. In N. Eisenberg (Ed.), *New directions for child development*. Vol. 44. San Francisco: Jossey-Bass. Pp. 25-49.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss*. Vol. 1. *Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss*. Vol. 2. *Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss*. Vol. 3. *Loss*. New York: Basic Books.
- Brentano, F. 1973 *Psychology from an empirical standpoint*. (Trs. by A. C. Rancurello, D. B. Terrell & L. L. McAlister) London: Routledge & Kegan Paul. (Original work published 1874.)
- Bretherton, I. 1991 Intentional communication and the development of an understanding of mind. In D. Frye & C. Moore (Eds.), *Children's theories of mind: Mental states and social understanding*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 49-75.
- Bretherton, I., & Beeghly, M. 1982 Talking about internal states: The acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, **18**, 906-921.
- Campos, J. J. 1983 The importance of affective communication in social referencing: A commentary on Feinman. *Merrill-Palmer Quarterly*, **29**, 83-87.
- Campos, J., Hiatt, S., Ramsay, D., Henderson, C., & Svejda, M. 1978 The emergence of fear on the visual cliff. In M. Lewis & L. Rosenblum (Eds.), *The origins of affect*. New York: Wiley.
- Campos, J. J., & Stenberg, C. R. 1981 Perception, appraisal and emotion: The onset of social referencing. In M. E. Lamb & L. R. Sherrod (Eds.), *Infant social cognition: Empirical and theoretical considerations*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 273-314.
- Corkum, V., & Moore, C. 1995 Development of joint visual attention in infants. In C. Moore & P. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 61-83.
- Darwin, C. 1872 *The expression of the emotions in man and animals*. Appleton. (Reprinted by University of Chicago Press, 1965).
- Desrochers, S., Richard, M., Decarie, T. G., & Allard, L. 1994 Developmental synchrony between social referencing and Piagetian sensorimotor causality. *Infant Behavior and Development*, **17**, 303-309.
- Dickstein, S., Thompson, R. A., Estes, D., Malkin, C., & Lamb, M. E. 1984 Social referencing and the security of attachment. *Infant Behavior and Development*, **7**, 507-516.
- Ekman, P. 1992 An argument for basic emotions. *Cognition & Emotion*, **6**, 169-200.
- 遠藤利彦 1995 乳幼児期における情動の発達とはたらき 麻生 武・内田伸子(編) 講座生涯発達心理学 2 人生への旅立ち——胎児・乳児・幼児前期—— 金子書房 Pp. 129-162.
- (Endo, T. 1995 The development and function of emotions in infancy. In T. Asao & N. Uchida (Eds.), *The psychology of life-span development* Vol. 2. *The beginning of human life: From embryonic period to early childhood*. Tokyo: Kaneko Books. Pp. 129-162.)

- 遠藤利彦 1996 喜怒哀楽の起源——情動の進化論・文化論—— 岩波書店
(Endo, T. 1996 *The origin of emotions: Evolutionary and cultural considerations on emotions*. Tokyo: Iwanami Books.)
- 遠藤利彦 1997 乳幼児期における自己と他者、そして心——関係性、自他の理解、および心の理論の関連性を探る—— 心理学評論, **40**, 57-77.
(Endo, T. 1997 Relationships and infants' early understandings of self, other, and mind: Theoretical examination into the relations among relationships, self/other understanding, and theory of mind. *Japanese Psychological Review*, **40**, 57-77.)
- 遠藤利彦 1998 乳幼児期における親子の心のつながり——心の発達を支えるものとしての関係性——丸野俊一・子安増生 (編) 子どもが“こころ”に気づくとき ミネルヴァ書房 Pp. 1-31.
(Endo, T. 1998 The mind-interface between infants and their parents: The relationships as facilitator of mental development. In S. Maruno & M. Koyasu (Eds.), *When children became aware of mind*. Kyoto: Minerva Books. Pp. 1-31.)
- Feinman, S. 1982 Social referencing in infancy. *Merrill Palmer Quarterly*, **28**, 445-470.
- Feinman, S., & Lewis, M. 1983 Social referencing at ten months: A second-order effect on infants' responses to strangers. *Child Development*, **54**, 878-887.
- Gibson, E. J., & Walk, P. D. 1960 The visual cliff. *Scientific American*, **202**, 64-71.
- Gopnik, A., & Meltzoff, A. N. 1994 Mind, bodies and persons: Young children's understanding of the self and others as reflected in imitation and "theory of mind" research. In S. T. Perker, R. W. Mitchell, & M. L. Boccia (Eds.), *Self-awareness in animals and humans*. New York: Cambridge University Press. Pp. 166-186.
- Gunner, M. R., & Stone, C. 1984 The effects of positive maternal affect on infant responses to pleasant, ambiguous, and fear-provoking toys. *Child Developments*, **55**, 1231-1236.
- Happé, F. 1994 *Autism: An introduction to psychological theory*. London: UCL Press.
- Hirshberg, L. M., & Svejda, M. 1990 When infants look to their parents: I. Infants' social referencing of mothers compared to fathers. *Child Development*, **61**, 1175-1186.
- Hobson, R. P. 1993 *Autism and the development of mind*. Hove, UK: Lawrence Erlbaum Associates.
- Horner, T. M. 1980 Two methods of studying stranger reactivity in infants: A review. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **21**, 203-219.
- Hornik, R., & Gunner, M. R. 1988 A descriptive analysis of infant social referencing. *Child Development*, **59**, 626-634.
- Hornik, R., Risenhoover, N., & Gunner, M. R. 1987 The effects of maternal positive, neutral, and negative affective communications on infant responses to new toys. *Child Development*, **58**, 937-944.
- Izard, C. 1991 *The psychology of emotions*. New York: Plenum.
- Klinnert, M. D. 1984 The regulation of infant behavior by maternal facial expression. *Infant Behavior and Development*, **7**, 447-465.
- Klinnert, M. D., Campos, J. J., Sorce, J. F., Emde, R. N., & Svejda, M. 1983 Emotions as behavior regulators: Social referencing in infancy. In R. Plutchik & H. Kellerman (Eds.), *Emotion: Theory, research and experience*. New York: Academic Press. Pp. 57-86.
- 子安増生・木下孝司 1997 <心の理論> 研究の展望 心理学研究, **68**, 51-67.
(Koyasu, M., & Kinoshita, T. 1997 Review of the research on "theory of mind." *Japanese Journal of Psychology*, **68**, 51-67.)
- Kuchuk, A., Vibbert, M., & Bornstein, M. H. 1986 The perception of smiling and its experimental correlates in three-month-old infants. *Child Development*, **87**, 1054-1061.
- Lazarus, R. 1991 *Emotion and adaptation*. New York: Oxford University Press.
- Lewis, M. 1991 Ways of knowing: Objective self-awareness or consciousness. *Developmental Review*, **11**, 231-243.
- Lewis, M. 1993 The emergence of human emotions. In M. Lewis & J. M. Havilland (Eds.), *Handbook of emotions*. New York: Guilford Press. Pp. 223-235.
- Lewis, M. 1995 Aspects of self: From systems to ideas. In P. Rochat (Ed.), *The self in infancy: Theory and research*. Amsterdam: Elsevier. Pp. 95-115.
- Meltzoff, A. N. 1988a Infant imitation and memory: Nine-month-olds in immediate deferred tests. *Child Development*, **56**, 62-72.
- Meltzoff, A. N. 1988b Infant imitation after a 1-week delay: Long-term memory for novel acts and multiple stimuli. *Developmental Psychology*, **24**, 470-476.
- Messer, D. 1997 Referential communication: The making sense of the social and physical worlds. In G. Bremner, A. Slater & G. Butterworth (Eds.), *Infant development: Recent advances*. Hove, UK: Psychology Press. Pp. 291-309.
- Mitchell, R. W. 1987 A comparative-developmental approach to understanding imitation. In P. P. G. Bateson & P. H. Klopfer (Eds.), *Perspectives in ethology*. Vol. 7. New York: Plenum. Pp. 183-215.
- Moore, C. 1996 Theories of mind in infancy. *British Journal of Developmental Psychology*, **14**, 19-40.
- Moore, C., & Corkum, V. 1994 Social understanding at the end of the first year of life. *Developmental Review*, **14**, 349-372.

- Mumme, D. L. 1993 *Rethinking social referencing: The influence of facial and vocal affect on infant behavior*. Unpublished doctoral dissertation, Stanford University, Stanford, CA.
- Mumme, D. L., & Fernald, A. 1995 *Infants' use of gaze in interpreting emotional signals*. Unpublished manuscript.
- Mumme, D. L., Fernald, A., & Herrera, C. 1996 Infants' response to facial and vocal emotional signals in a social referencing paradigm. *Child Development*, **67**, 3219-3237.
- Oatley, K. 1992 *Best laid schemes: The psychology of emotions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 荻野美佐子 1997 コミュニケーションの発達 井上健治・久保ゆかり (編) 子どもの社会的発達 東京大学出版会 Pp. 185-204.
- (Ogino, M. 1997 The development of communications. In K. Inoue & Y. Kubo (Eds.), *Social development in childhood*. Tokyo: University of Tokyo Press. Pp. 185-204.)
- O'Neill, D. K. 1996 Two-year-old children's sensitivity to a parent's knowledge state when making requests. *Child Development*, **67**, 659-677.
- Perner, J. 1991 *Understanding the representational mind*. Cambridge, MA: Bradford Books/MIT Press.
- Piaget, J., & Inhelder, B. 1969 *The psychology of the child*. London: Routledge.
- Premack, D., & Woodruff, G. 1978 Does the chimpanzee have a "theory of mind"? *Brain and Behavioral Sciences*, **1**, 515-526.
- Reddy, V., Hay, D., Murray, L., & Trevarthen, C. 1997 Communication in infancy: Mutual regulation of affect and attention. In G. Bremner, A. Slater & G. Butterworth (Eds.), *Infant development: Recent advances*. Hove, UK: Psychology Press. Pp. 247-274.
- Rosen, W. D., Adamson, L. B., & Bakeman, R. 1992 An experimental investigation of infant social referencing: Mothers' messages and gender differences. *Developmental Psychology*, **28**, 1172-1178.
- Rutter, M. 1987 Psychosocial resilience and protective mechanisms. *American Journal of Orthopsychiatry*, **57**, 316-331.
- Saarni, C. 1999 *The development of emotional competence*. New York: Guilford.
- Saarni, C., Mumme, D. L., & Campos, J. J. 1998 Emotional development: Action, communication, and understanding. In W. Damon & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology*. 5th ed. Vol. 3. New York: Wiley. Pp. 237-309.
- Searle, J. R. 1983 *Intentionality: An essay in the Philosophy of mind*. New York: Cambridge University Press.
- Shatz, M. 1987 Bootstrapping operations in child language. In K. E. Nelson & A. van Kleeck (Eds.), *Children's language*. Vol. 6. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Sorce, J. F., Emde, R. N., Campos, J., & Klinnert, M. D. 1985 Maternal emotional signaling: Its effect on the visual cliff behavior of 1-year-olds. *Developmental Psychology*, **21**, 195-200.
- Sroufe, L. A. 1996 *Emotional development: The organization of emotional life in the early years*. New York: Cambridge University Press.
- Tomasello, M. 1993 The interpersonal origins of self concept. In U. Neisser (Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 185-204.
- Tomasello, M. 1995a Understanding the self as social agent. In P. Rochat (Ed.), *The self in infancy: Theory and research*. Amsterdam: Elsevier. Pp. 449-460.
- Tomasello, M. 1995b Joint attention as social cognition. In C. Moore & P. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 103-130.
- Tomasello, M., Kruger, A. C., & Ratner, H. H. 1993 Cultural learning. *Behavioral and Brain Sciences*, **16**, 495-552.
- Trevarthen, C. 1979 Communication and cooperation in early infancy: A description of primary intersubjectivity. In M. Bullowa (Ed.), *Before speech*. New York: Cambridge University Press. Pp. 321-347.
- Trevarthen, C., & Hubley, P. 1978 Secondary intersubjectivity: Confidence, confiding, and acts of meaning in the first year. In A. Lock (Ed.), *Action, gesture, and symbol: The emergence of language*. New York: Academic Press. Pp. 183-229.
- Walden, T. A. 1991 Infant social referencing. In J. Gerber & K. Dodge (Eds.), *The development of emotion regulation and dysregulation*. Cambridge, England: Cambridge University Press. Pp. 69-88.
- Walden, T. A., & Baxter, A. 1989 The effect of context and age on social referencing. *Child Development*, **60**, 1511-1518.
- Walden, T., & Knieps, L. 1996 Reading and responding to social signals. In M. Lewis & M. W. Sullivan (Eds.), *Emotional development in atypical children*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. Pp. 29-42.
- Walden, T. A., & Ogan, T. A. 1988 The Development of social referencing. *Child Development*, **59**, 1230-1240.
- Walker-Andrews, A. S. 1997 Infants' perception of expressive behaviors: Differentiation of multimodal information. *Psychological Bulletin*, **121**, 437-456.
- Walker-Andrews, A. S., & Dickson, L. R. 1997 Infants' understanding of affect. In S. Hala (Ed.), *The development of social cognition*. Hove, UK: Psychology Press. Pp. 161-186.

- Wellman, H. M. 1990 *The child's theory of mind*.
Cambridge: MIT Press.
- Zarbatany, L., & Lamb, M. E. 1985 Social referenc-
ing as a function of information source: Mothers
versus strangers. *Infant Behavior and Development*,
8, 25-33.
- Zumbahlen, M., & Crawley, A. 1996 *Infants' early*

*referential behavior in prohibition contexts: The
emergence of social referencing?* Paper presented at
the meetings of the International Conference on
Infant Studies, Providence, RI.

——1999. 12. 20 受稿, 2000. 7. 1 受理——